

地域コミュニティ再生&低炭素ライフスタイル型観光地域・長期滞在型リゾートを
基盤とした「クオリティーツーリズム(心に響く滞在型観光)」の提案
～「訪れる人の誰もの心が安らぐ、第一級の田舎作り」構想～

はじめに

現在、我が国の抱える課題は、非常に多い。加えて、3月11日の東日本大震災、およびその後の原発事故による被災、未だ止む気配のない余震などにより、過疎地域の少子高齢化問題など、従来からの我が国の課題が象徴的に浮き彫りにされてきている。

今回の震災と、神戸の震災の大きな違いは、被災地の高齢化率とも言われている。復興をするにも、高齢者ばかりで、その力強い担い手となるべき若者が不在であることが、大きな問題となっている。そのために、全国から、社会起業家が東北を目指して集まるといふ動きにもつながっているところであり、苦しみの中、一筋の光明と言えるだろう。

また、震災前より継続して指摘されてきたのは、長崎を始めとした離島、半島、山間部が、限界集落を数多く抱え、日本文化の基層を担ってきた、中山間地域の暮らし、日本の原風景とも言うべき風景の、持続可能性が問われていることであった。この問題の解決に対して、我が国としてまだ、はっきりとした方向性が導きだされているわけではない。ある意味、座して死を待つという状況かもしれない。

もちろん、雲仙を含む島原半島地区においても、過疎の問題、少子高齢化の問題、交流人口の減少等、非常に大きな課題となっている。

昭和の後半から課題化され始めた過疎化の地域問題は、今日、質的様態を変えてなお大きな課題である。加えて、都市と地方の地域格差の是正も依然として大きな課題として推移してきた。今日、国土の資源、伝統文化を担ってきた地域、特に、離島・半島・山間部の人々の暮らしの消滅が危惧されている。このままでは、良き日本の生活文化の伝統は我々の世代で、絶えてしまうと考えられる。

また、この3月に起きた東日本の大震災を通して、分かったことがある。大きさの大小関係なく、人のつくったものは全て「ゴミ」になる。家、舟、工場、原発、ダム、その堤防、防波堤。。全てである。そして仕組みも含めて、人間のチカラを超えるモノほど、その始末が、人の手に負えない巨大な文明のゴミとなる。

文明のチカラを信じて、私たちは高度成長期をかけぬけてきた。そして、多大なエネルギーを自然界から調達し、利便性豊かなものに囲まれ、工業化社会を実現してきた。しかし、その間、洪水被害は、過去40年で7倍になったそうである。この原因は森林伐採、湿地の埋め立て、地球温暖化等、全て人為的行為の結果であると言われている。日本では、江戸末期には、森林伐採により山は禿げ山が多かったそうだ。しかし、明治以降人々は植林に努めて、極めて高い我が国の森林率が維持されてきたことは、あまり

知られていない。当時の先達は、山が荒れると水害が多くなることを経験的に知っていた。ところがである。私たちは、学ぶことを忘れてしまっていた。また、東日本被災地の中で、津波対応能力は、縄文人の方が上だったことを知る。

(7000年前の縄文集落があったところは高台で被災しなかったからだ。)

グローバル経済の中に飲み込まれ、我が国の地域も世界のサプライチェーンの中に組み込まれている。東北地域は、長年の努力の結果、世界の自動車産業の部品製造の拠点だったことが、震災後明らかになった。世界の自動車生産が震災直後、全面的に滞ることとなった。逆に言うと、ある地域で完結する経済が既に失われつつあるということになる。地球株式会社は、いつでも世界のどこかで起きる事故や問題の度に、連鎖倒産の危機をはらんでいるとあってよいだろう。そこに、日本は、少子高齢化という、マイナスの状況がある。

地域には、人間が暮らしてゆくために必要な、日常を支える農業・漁業・商業等があり、銀行や学校、歩いていける範囲の中に、すべての生活環境を支えるものが存在した。

しかし、現在は、このような地域(コミュニティ単位)で、完結する生活文化圏を単にサービスや産業の競争力だけの視点で、構築してしまい、地域のつながり、人と人の日常のコミュニケーションの機会を軽視しているように思える。

都市資本の大型ショッピングセンターが郊外にできたおかげで、従来の商店街がシャッター通りになり、地域にお金が回らなくなるだけではなく、日常のつながりすら失われてしまう。これでは、生活空間がなくなる。土地、地域の日常を守ることなくして、私たちの未来はない。次世代に何を地域の記憶として、伝えてゆくことができるだろうか？

私たちは、ここで、今一度考えなければならない。風土という言葉がある。その地の生命を育んできたものは、その地に長年吹いてきた「風」であり、その地を育んできた「土」である。あらためて、「風」を冠した「風景」「風土」「風情」「風気」「風合」等を大事にしなければ、次世代に伝えるべき地域の価値は残るはずもない。

その意味では、「低エネルギー消費による循環型社会、持続可能な社会」を実現し、地域の残された自然環境、そして古くから、いとなまれてきている地域独自の生活環境、生活文化の維持は、必須となってくる。

かつては、私たちは共同社会であった。結いや講がある社会だった。それがいつしか共同体を拒絶し、個人で生きることを選択し、個別利益社会を形成してきた。高度成長経済がその実現を支えていた。だれもがお金で自分の希望を叶えることができたからだ。しかし、右肩上がりの成長もいずれ終わりがくる。このまま共同社会へ再移行せず、このまま個人の利益優先社会で、つながりを失ったままの地域社会では、災害時にそれぞれの命も守れないこととなる。

祭りは、平時における災害非常訓練の意味もあり、地域の全ての人の役割を

毎年再確認している。お祭りは地域コミュニティ維持の仕組みであり、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）と呼ばれるものの一つである。これからの地域づくりには、この祭りのように、人がつながる仕組み、地域の人々で、一体となり地域を作ってゆく仕組みが必要となる。

そのために、地域づくりの基本的な旗印、ビジョンを掲げたいと思う。

それが、「訪れる人の誰も心が安らく、第一級の田舎作り」構想である。

訪れる人々の心が安らくするためには、地域で迎える、もてなす人々が、その地域を心から愛していることが、最大のポイントとなる。その地にすんで暮らしている人が、その地を嫌いだったり、好きではないとしたら、その地が、来訪者にとって心地よい者であるはずがないからである。自らが信じてないモノを売ることはなかなか難しい。

そこで、一流の田舎づくりが構成する組織編制から住民と訪れる人のも安らぎや豊かさを日々実感でき、落ち着いた生活、恵まれた生活環境など質(クオリティー)の向上を表す展開図を作成した。

図の特徴として

環境保全、交通体系整備、人材育成、観光・地域振興、情報発信、この5つが地域の元気の源とする。

雲仙らしさ（雲仙らしさって何？）を表現するために

- 1) 「環境保全・生態系維持」の観点を取り入れた街づくり、
- 2) ユニバーサルデザインの街づくり

= すべての人にやさしい街づくりを目指してゆく。

雲仙スタイルの構築

- * 「お金を使うのではなく、時間を使って頂く」 = 長期滞在型の仕組みづくり
- * マイスター制度の導入 = 「一人一人の適正な能力を発揮できるシステム」
- ・ 一流の場には、そこにふさわしい高品質の多品種少量生産のこだわり職人や、地域の歴史や文化を表現しながら街案内をするガイドも必要となる。
- ・ 職人社会を支えているのは、生活者自身の質の高い生活意識や量より質、暮らしの楽しさを味わうゆとりや心の豊かさがあるからだと思う。
- ・ マイスター制度の価値観やライフスタイルが美しい街並み景観を守り、保存し創出するとともに、新しい街づくりへの貢献や地方に固有の文化と伝統が継承され、ひいては、地域に魅力ある中小企業が根付き、地域経済を支え、若者が帰ってくる素地となる。

観光特区の検討

*ソフト面で制度的観光特区を設け、ドル、ユーロ、元、ウォンの使える観光地、施設
のモデル地区や種々な特典など、いろいろな技術的問題を考慮して検討。

新しい目玉施設の整備：長期滞在と親和性のある、医療ツーリズムの実現を

*テルマリズム・センター(鉱泉療法)タラソセラピーセンター(海洋海水治療)の設置
高齢者および、女性層を取り込む施策として、日本で先駆けて展開したい。
長期滞在での治療が健康保険や社会保険が適用されることで気軽に受けられる。
テルマリズム・タラソセラピーは雲仙に於いては、先端の医学として認知されている。

情報発信の仕組みづくり：窓口の一本化&フェデレーション化

地域に点在する組織を一つに集約し窓口を一本化することにより

一番旬に必要な情報を迷わすことなく、お客様、地元にも発信できる。

そして、フェデレーション化することにより、個々の活動やイベントなどの
効率化もはかれ戦略的な情報発信を可能とする。

展開図の基本となるのは、

雲仙の「おもてなし」の心である。

それは、「人との出逢い」を大切にし地域性を活かし、それぞれの個性や創造性を発揮
する「今だけ・ここだけ・あなただけ」の体感・体験であると考え。そして付加価値
ではなく、もともとある「潜在価値」を表現することである。

このコンセプトは、地域の受け入れる側すべての人々が育ててゆくものである。雲仙で
は、お客様がゲストであり、受け入れ側の人々はみな、ホストであると考え。アルバ
イトでもそのことが徹底されている。20年前、雲仙普賢岳災害(大規模火砕流)時、ある
ホテルなどの施設では、自分も家族の安否が不安な被災者であるはずの住民(ホスト)
たちは、その場にとどまり、不安なゲストたちの支援を不眠不休で行ったそうである。
このような、いつどんなときも、誰かにつくそうという気持ち、この思いや行動が
「リアリティ」を生み、「何を一番大切に思っているのか?」、「このような行動は決し
て特別な行動ではない」等に気づき共感、「これが自分達に対する最高のおもてなしの
態度である」とゲストは気づき、それが最大の喜び体験・幸せ体験となる。

(311ではディズニーランドも同じようにゲストの安全確保・不安解消を行った。)

最後に

従来、マスツーリズムでは、観光資源はその地域の特色をよく見極めることなく利用
されていた。昭和時代、温泉宿場町は、どの地域でもほとんど同じモデルだった。

今こそ、

「ローカル」

雲仙の自然を共有財産に足元の豊かさ、生き方を考えるネットワークの構築が必要である。

「ローテク」

農林漁業に生きづく技術や知恵や一次産業・1.5次産業にこだわること。

「ローインパクト」

雲仙の自然に負担をかけない風景を保全しながら活用する仕組みづくり。

* 地域の個性を前面に出した持続可能で多様な観光生活地域社会の構築。

地域住民が何らかの観光活動に参加し、将来的にも継続して観光客に高い満足を与えられる観光地域社会づくりが、今こそ必要である。

だからこそ、これからの観光は受け入れる側と訪れる側とが

「一緒に価値を紡ぎ出す関係」を考えるべきである。

そのなかで「自分にとっての雲仙」だったのが、「雲仙が自分ごと」となりそれに感動した来たくなる。それが「お客様と地元の両方で体験価値を共創」することである。これが成功するためのプロセスと考える。必要なことは、

「ゲスト自体が、ホストと一緒にになって経験価値を生み出す当事者に自発的になってもらうことが大切である。」地域の側は、その感動や体験のお手伝いをして、一人一人のお客さんの笑顔が、自分たちの資産・宝であると考えられるべきであろう。

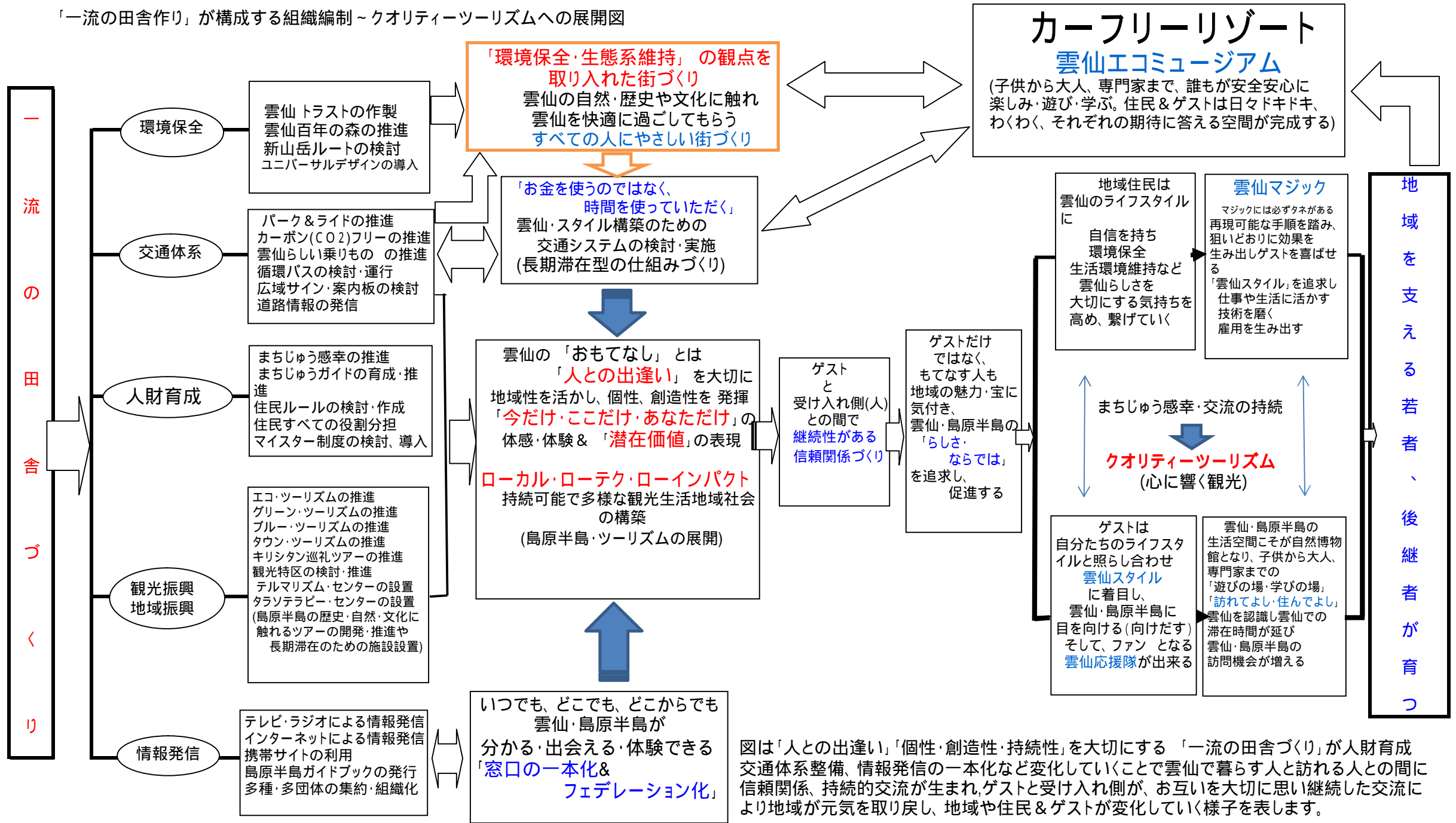
このような取り組みを通して、長期滞在型リゾートとして、心が安らぐ、それぞれの第一級の田舎として、雲仙の風景や町並み、雲仙エコミュージアム(自然博物館)に人は集まり、地域の歴史や文化、住民とのふれあいや交流を通じて、人間理解・信頼関係の構築など、将来、日本が求められる相互理解と、自分探し自分発見・生きがい探し、そしてゆとりある充実した人生のきっかけとなる。

そして、人々は「心の観光」・「クオリティーツーリズム」を希求する。

上記の取り組みは、これからの日本社会の地域の活性化や高齢化社会にふさわしい街づくりの推進、地域文化の振興に寄与することを最終の目的としている。

雲仙が、持続可能な、古き良き日本の生活文化を伝えてゆける地域となることを願って止まない。

「一流の田舎作り」が構成する組織編制～クオリティーツーリズムへの展開図



図は「人との出逢い」「個性・創造性・持続性」を大切にする「一流の田舎づくり」が人財育成 交通体系整備、情報発信の一本化など変化していくことで雲仙で暮らす人と訪れる人との間に 信頼関係、持続的交流が生まれ、ゲストと受け入れ側が、お互いを大切に思い続けた交流により 地域が元気を取り戻し、地域や住民&ゲストが変化していく様子を表します。